

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

レイルウェイ 運命の旅路

2013年・オーストラリア・イギリス映画
配給/KADOKAWA・117分

2014 (平成26) 年5月3日鑑賞 シネ・リーブル梅田

Data

監督：ジョナサン・テプリツキー
脚本：フランク・コットレル・ボイス、アンディ・パターソン
原作：エリック・ローマクス『レイルウェイ 運命の旅路』（角川文庫刊）
出演：コリン・ファース／ニコール・キッドマン／真田広之／ジェレミー・アーヴァイン／ステラン・スカルスガルド／石田淡朗／サム・リード

👁️👁️ みどころ

タイとビルマを結ぶ泰緬鉄道が、「死の鉄道」と呼ばれていたのはなぜ？それは『クワイ河マーチ』で名高いデビッド・リーン監督の名作『戦場にかける橋』（57年）を見れば明らかだが、イギリス軍捕虜と日本人通訳の間にはこんな凄惨な物語が・・・。

1995年に「エスクエア」誌でノンフィクション大賞を受賞した原作によってはじめて世に出た物語の冒頭のテーマは夫婦愛、究極のテーマは奇跡的な赦した。さて、そんなテーマで展開される若き日の2人の確執とは・・・？

汝の敵を愛せよ。それは言うは易く、行うは難しい。しかし、本作を見れば、人間の善意を少しは信じられるようになるかも・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■あれはフィクション！これは実話にもとづいた物語！■□■

昨年12月に公開された『永遠の0』（13年）（『シネマルーム31』132頁参照）は大ヒットとなった。『キネマ旬報』3月下旬号によると、「2月の第3週末に8週続いた首位独占状態がついに破られたが、2月16日時点でその累計興行収入は75億円。80億円到達も射程圏内」らしい。また、4月30日付朝日新聞は『特攻 伝えられない実像』と題して、鹿児島県南九州市知覧にある「知覧特攻平和会館」を取り上げるについて、『永遠の0』がきっかけでここを訪れた学生を紹介していた。知覧特攻平和会館には1975年の開館以来1700万人が訪れ、特攻関連の映画があると若い来館者が増えるそうだ。

『永遠の0』は百田尚樹氏の小説が原作だからすべてフィクションだが、本作『レイルウェイ 運命の旅路』は「based on a true story」、つまり事実に

もとづいた物語だ。

■□■原作は？あの「名作」に比べると？■□■

本作の原作になったのは、1995年度「エスクァイア」誌にてノンフィクション大賞を受賞したエリック・ローマックスの自叙伝『The Railway Man』。これは、第2次世界大戦中にイギリスの将校ながら、日本軍の物資輸送のためのタイとビルマを結ぶ泰緬鉄道の建設作業に敗戦国の捕虜として強制労働させられた自らの体験を綴ったものだ。

泰緬鉄道建設のためのイギリス人将校や兵士の強制労働と聞けば、すぐに思い出すのがデビッド・リーン監督の『戦場にかかる橋』(57年)、『シネマルーム14』152頁参照)。これは、アカデミー賞作品賞・監督賞等7部門を受賞した名作。その主題曲『クワイ河マーチ』は超有名だが、クワイ河は架空の名前らしい。Wikipediaによると、その舞台となった鉄橋が架かる川の旧来の名称はメークロン川であったが、この映画によって「クワイ川」が著名となったために、クウェー・ヤイ川と改名され、クウェー川鉄橋は公開後半世紀を経過した現在でも観光名所となっているようだ。『戦場にかかる橋』もピエール・ブールの原作『戦場にかかる橋』(52年)にもとづく物語だったが、デビット・リーン監督による独自の演出が目立ち、それによって大ヒットした感が高い。本作のパンフレットのイントロダクションは、その点について「作品は傑作であるがあくまでもフィクションという位置づけであり、実際に作業員として働き戦禍を生き延びた退役軍人たちにとって真実を伝えるものではなかった。」と書いている。

それに対して、エリック・ローマックスの原作は、タイとビルマを結んでいた悪名高き「死の鉄道」で作業員として生き残った者のうち、戦時中の出来事について触れるものが少ない中、数十年経ってやっと発表できたものらしい。また、その映画化を強く望んだ脚本家のフランク・コットレル・ボイスがエリック本人から映画化の承諾を得ても、そのプロジェクトは困難を極めたい。そんな原作が「アメコミ」のようなエンタメ作ではなく、シリアスで重々しいものであることは当然だが、そこでは一体何がテーマとして描かれているの？

ちなみに、大島渚監督がビートたけしと坂本龍一を起用して、ジャワ島レバクセンバタの日本軍俘虜収容所の出来事を描いた『戦場のメリークリスマス』(83年)も名作だったが、その出演者はすべて男ばかりで、女優は一人も出演していなかった。しかして、同じようなテーマの本作(?)に、今は少しトウが立ったとはいえ、私の大好きな美人女優ニコール・キッドマンが登場するのは一体なぜ？

■□■本作前半のテーマは、夫婦愛！■□■

本作は冒頭、列車好きの初老の男、実は元イギリス軍将校で今は退役軍人会のメンバー

であるエリック・ローマクス（コリン・ファース）が、こんな偶然ってホントにあるの？という奇跡的な巡り合いの中で、同じ列車の同じ座席に座った美しい女性パトリシア（ニコール・キッドマン）と意気投合し、恋におち、結婚式に至るストーリーが一気に描かれる。

エリックのみならずパトリシアの方もそれなりにいい年だから、それぞれ何らかの「過去」を持っているのは当然だが、とりわけエリックの立場に立つと、あの年で、あんな偶然で、あんないい女と巡り合い、結婚まで進めたのは超ラッキー。普段はいつも難しい顔をしているエリックが、パトリシアと知り合ってから子供のような笑顔を見せることを、「死の鉄道」と呼ばれた泰緬鉄道建設のために、日本軍捕虜となって働いていたエリックと同じ退役軍人のフィンレイ（ステラン・スカルスガルド）はわがことのように喜んだが、エリックが背負い続けている「あの時の苦悩」はパトリシアとの結婚生活の中で洗い流されるの？パトリシアを演ずるニコール・キッドマンは相変わらずの美しさでエリックに対して献身的な愛を注いでいるが、時折示すエリックの孤独な顔には困ったもの。ホントの夫婦なら悩み事も共有すべきでは？それは一般論としては正しいが、エリックがあの時日本軍から受けた尋問、拷問の過酷さを考えると、その「共有」はとてもムリ。昼間は寡黙に過ごすことができても夜になると怒りと悪夢に苛まれ、本人ですらそれをコントロールできない状態なのだから。

『英国王のスピーチ』（10年）でアカデミー賞主演男優賞を受賞（『シネマルーム26』10頁参照）するなど、数々の映画で名演技を披露しているコリン・ファースが、そんな苦悩に満ちた退役軍人の姿を好演している。対するニコール・キッドマンは本作ではあくまで受け身の演技だが、エリックに対する厚い信頼と苦悶するエリックを何とか救いたいという思いが切なく伝わる演技で応えている。このように本作前半のテーマは、そんな境遇にある退役軍人とその妻との夫婦愛だから、それをじっくりと。

■究極のテーマに行きつくまでのストーリー その1■

映画は便利な芸術だから、現在のエリックと若き日のエリック（ジェレミー・アーヴァイン）を同時並行で見せることができるし、ストーリーも今のものと昔のものを同時並行で見せることができる。泰緬鉄道建設のための過酷な肉体労働に従事するイギリス人将校兵士たちの服装は『戦場にかける橋』で見たものと同じだが、本作では日本軍に隠れて外部と通信していたという疑いの中で、「犯人は誰だ!」という緊張したシーンが展開していく。

若き日のエリックが尋問にあたった若き日の永瀬隆（石田淡朗）に説明するように、「ラジオで本国の情報を聞いていだけで、発信はしていない」というのがホントは真実かもしれないが、それで「なるほど」と納得していたのでは、捕虜に対する尋問は失格。そこで本作に見るような「水責め」「オープン責め」の拷問となるわけだ。『ゼロ・ダーク・サーティ』（12年）（『シネマルーム30』35頁参照）で見た、イラク戦争の中で捕虜にさ

れたイラク人兵士へのCIAによる過酷な「水責め」と同じ拷問のやり方を本作でも見てビックリ！『戦場にかける橋』でも、主人公ニコルス大佐（アレック・ギネス）の誇り高いイギリス人将校というキャラが際立っていたが、それは本作でも同じだ。2010年のNHK大河ドラマ『龍馬伝』では、人斬り以蔵こと岡田以蔵は、自分に「人斬り」を命じたのが土佐勤王党の首領、武市平半太であることを決して自白しなかったから立派なもの。それと同じように、エリックもいくらか拷問され、自白を強要されても自白しなかったから偉いものだ。

しかし、それに耐え抜いた分だけ、その苦悩や憎しみが生き残ったエリックの心の中に深く蓄積されたのは当然。パトリシアとの思いがけない出会いと幸せな結婚によってその過去と決別することができたら、エリックは原作を書くこともなかったし、再びあの建設現場に赴くこともなかっただろう。しかし、本作中盤のストーリー展開を見ると、パトリシアとの幸せな結婚生活をもってすら、エリックの苦悩を解き放つことはできなかったようだ。そして、そんなエリックの苦悩に手を焼いたパトリシアがフィンレイになまじっかある相談をしたことから、フィンレイがエリックに対して明らかにした、ある衝撃的な事実によってストーリーは次の次元へ・・・。



『レールウェイ 運命の旅路』 価格 ¥3,800+税
 発売元・販売元 株式会社KADOKAWA 角川書店
 ©2013 Railway Man Pty Ltd, Railway Man Limited, Screen Queensland Pty Limited, Screen NSW and Screen Australia

■究極のテーマに行きつくまでのストーリー その2■

戦争で何千人が死のうと必ず生き残る人間がいることは、『ローン・サバイバー』（13年）（『シネマルーム32』参照）を見ても明らかだ。泰緬鉄道建設の過酷な労働の中でも、また常軌を逸する数々の拷問の中でもエリックは生き延びたが、さて永瀬の方は？

日本の軍人は、「生きて虜囚の辱めを受けず」という教育を受けたし、永瀬自身も偉そう

に「日本がもし戦争に負けたら、俺は潔く自決する」と言っていたはずだが、フィンレイが得た情報によれば、永瀬は生きているらしい。しかも、何と彼は今タイに住み、戦争体験を伝えようと寺院を建て、ツアー客に戦争博物館の見学をさせているらしい。エリックは今なお、永瀬を刺し殺す、もしくはそのど首をかつ切るための小さなナイフを持っていたが、いつそれを持って永瀬のもとに向かうの？

フィンレイからさまざまな情報を聞く中で、エリックの心の中の苦悩を知ったパトリシアは、少しでもエリックとそれを共有したいと願ったが、フィンレイが首つり自殺を遂げるといふショッキングな事件が起きた後、ついにエリックは・・・。

■□■ 2人の名優の息詰まる神経戦に期待！ ■□■

『ラスト・サムライ』（03年）（『シネマルーム3』137頁参照）では渡辺謙、真田広之、そしてトム・クルーズという3人の「夢の競演」が実現し、2人の日本人俳優は一躍「ハリウッドで通用する国際派スター」という称号を手に入れた。その後、渡辺謙はクリント・イーストウッド監督の『父親たちの星条旗』（06年）（『シネマルーム12』12頁参照）と『硫黄島からの手紙』（06年）（『シネマルーム12』21頁参照）に出演したが、その後は再び「国内路線」に戻った感が強い。しかし、真田広之は逆に日本を嫌うかのように（?）、『上海の伯爵夫人』（05年）（『シネマルーム12』288頁、『シネマルーム17』214頁参照）、『最終目的地』（08年）（『シネマルーム29』未掲載）、『ウルヴァリン：SAMURAI』（13年）、『47RONIN』（13年）（『シネマルーム32』参照）と外国映画に出演し続けている。『たそがれ清兵衛』（02年）で彼は日本アカデミー賞主演男優賞を受賞した（『シネマルーム2』68頁参照）が、本作の永瀬にみる彼の演技は『たそがれ清兵衛』で見せた演技とそっくり。つまり、自分の感情を抑制しながら、心の中の思いをしっかりと伝える演技が円熟の域に達しているということだ。ツアー客の案内を終えて博物館を閉めたのに、勝手に客に入られたのでは困るのは当然。そこで、永瀬は丁寧に「今日は閉館したので明日の朝またお越しく下さい」と声をかけたのだが（もちろん英語で）、そこでエリックは永瀬に対していかなる行動を・・・？

小さなデスクに向かって向き合う2人の姿は、双方とも老けたものの、その真剣さはあの時と全く同じ。違うのは、尋問する側とされる側が逆転していることだけだ。弁護士の私の目では、ここでの最大の争点は、永瀬は尋問に立ち会った通訳にすぎなかったのか、それとも永瀬自身が尋問官なのか、ということだ。永瀬は大日本帝国軍人ながら、単なる通訳にすぎないというウソっぽいが、そうかといって、エリックの生殺与奪の権限を一手に握った尋問官というわけではない。その点が本作後半に展開される、エリックと永瀬との息詰まる神経戦最大の争点になる。そこで永瀬が正当な弁解をするのは当然だが、さてエリックはそれを聞く耳を持っているの？

その時に使われていた拷問用の棍棒はそれで殴られたら骨が折れてしまうほどの堅さがある。今エリックはそれで永瀬の腕をへし折るべく腕を差し出すよう要求したが、それに対して永瀬はいかなる対応を？本作は決してスリリングな展開が楽しめる映画ではないが、

クライマックスとなる究極のテーマに向けて、2人の名優による息詰まる神経戦が展開されていくので、それをじっくりと楽しみたい。

■□■しかし、本作究極のテーマは？■□■

イエス・キリストは「汝の敵を愛せよ」と教えたが、普通の人間にはその実行は難しい。そもそも、ヨーロッパのキリスト教徒がみんなその教えを守っていたら、中世の宗教戦争はもちろん、近代の植民地争奪戦争や帝国主義相互間の直接戦争も起きなかったはずだ。本作を観ていても、エリックは敬虔なキリスト教徒だが、ナイフを懐に秘めて「戦争犠牲者の霊を慰める」ための巡礼ツアーをしている永瀬に会いに行ったのは、場合によれば永瀬を殺すため。これは明らかにイエス・キリストが禁じた「復讐」だし、近代刑法でもそれは犯罪とされているが、エリックがその誘惑に駆られたのは仕方ない。しかし、エリックは左腕を差し出す永瀬に対して、あの棍棒を振り下ろしたの？また、永瀬の首もとに突きつけたあのナイフで、のど首をかつ切ったの？自分が受けたあの過酷な「水責め」の拷問を考えれば、エリックは同じ思いを永瀬に味わわせたいと思ったはず。また、竹で編まれたオープンの中に永瀬を放り込んだのだから、その中で苦しむ永瀬の姿をみて拍手喝采したいと思ったはずだ。しかし、そんな復讐物語ではきっとエリック・ローマクスが書いた原作はノンフィクション大賞を受賞することはできなかっただろう。つまり、本作が描く「究極のテーマ」は、奇跡的な「赦し」なのだ。

イエス・キリストは敵がどんな悪い奴でもその敵を愛せよと教えたし、それを実行した。しかし、私が思うに、エリックが本作に見るような赦しを実行できたのは、きっと永瀬の誠実な対応があったからだ。多くの日本人は竹山道雄の小説『ビルマの堅琴』に描かれた水島上等兵の戦後の生きざまはよく知っているが、本作に登場する永瀬のことは全く知らないはず。しかし、本作のパンフレットの中にある満田康弘氏（KSB瀬戸内海放送の記者）の「永瀬隆という生き方」という特別寄稿を読めば、永瀬が戦後にみせた、犠牲者の霊を慰めるためのタイ巡礼のツアーは実に誠実で感動的だ。そんなホントの永瀬の姿を知ったからこそ、エリックは永瀬を赦すことができたのだろう。ある元捕虜は永瀬のことを「握手したいたった一人の日本人」と呼んだそうだし、「98年の天皇訪英に際して日の丸を焼いて抗議した元捕虜はその後日本を訪問し、永瀬さんを『伝説の人』と呼んで抱きしめた」そうだ。永瀬は2011年6月に死亡したが、その葬儀に寄せたエリックのメッセージは「あなたはいつも変わらず本当に勇敢な男でした。あなたと出会ったことは私にとって人生の特権でした。ではあなた自身が用いた表現をお借りして申し上げます。さらば盟友、さらばわが兄弟。」という最高の賛辞だったというから素晴らしい。

本作の作り方には単調な面も目につくが、そんな究極のテーマをじっくり味わうには、かえってその方がいいのかもしれない。